＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料　第134号　毎月発行

発行 2023 年（令和 5 年）7 月 16 日　日曜日

2 0 2 3 年（ 令 和 5 年 ）7 月 16 日　日 曜 日

大谷翔平の大記録続出にだれも驚かなくなった
彼は野球だけでなく価値観も生活も並外れている
彼から「新東北人リーダーモデル」を引出せないか

大谷翔平の偉業は形容不能で「宇宙人」に！

先日、大谷翔平選手は、MLB二〇二三オールスターゲームに三度目の出場を果たした。しかも、アメリカンリーグのファン投票では断トツの一位だった。

これだけでもすごいことだが、だれも驚かない。

最近の彼の活躍には目を見張るものがある。特に最近好調な打撃であるが、日々多くのニュースに接しているので、ここではあえて触れない。

他方、ピッチャーとしての成績だってすごい。

彼の投げる、ヨコに大きく曲がるスライダーは新たに「スイーパー」と名づけられているが、まさに「魔球」である。

最初にこの「魔球」を空振りした相手打者たちの悔しそうな、怒りにも見える表情、いったい何が起きたんだという驚きなどが入り混じった表情には、ある意味で異様な迫力があった。

大谷投手は、「プロとして絶対に次は許さんぞ！」という打ち取った相手選手の身体からにじみ出るエネルギーにも勝たなくてはならないのだ。

こうしたすごい活躍が投打両面というのがさらにすごいのだが、最近はこの投打二刀流に、見る側もすっかり慣れすぎてしまっている感じがする。

そんなことで、彼の「記録更新」というニュースを耳にしても心が動かなくなった。それほど頻繁に「記録更新」が次々に発生する。

もう慣れっこになり特段の感動がない。大谷翔平だから当然だろうと素通りしてはいないだろうか？

とはいえ、投打二刀流がやはりすごいなと思う瞬間もある。

打者としてベース間をフルスピードで走って、スリーアウトとなり、ピッチャーに切り替えるときの肩で息をする姿を見たとき、またはその逆で、ピッチャーから打者に切り替えるときのプロテクター等の装着を急がねばならないシーンを見たとき、すごいことをやっているんだとあらためて思うときぐらいである。

そんなところから、彼を評して「宇宙人」とまで言う人も出てきた。これはすなわち、表現のしようがないということでもあるのかと思ったりする。大谷選手は、東北から誕生した「宇宙人」なのか？

ケガをしない、休まない

所属チームのエンジェルスはケガ人が多い。多いというよりケガ人だらけといってよい。

この点で、大谷選手はすごいと思う。

試合に出場できないような大ケガをしない。これも並外れている。

MLBには選手の肉体マネジメントの専門スタッフがいるはずだが、それにもかかわらずよくケガをする。他方、大谷選手はケガをしない。きっと、ケガをしないための、外には絶対見せないような「ケガをしないマネジメント」があって、それは並大抵のものではないかもしれない。

それから、投打二刀流で毎試合出て肉体的に疲れないわけがないが、そうしたそぶりを見せず、休まない。

このことはいままであまり注目されて来なかったが、隠れた大きな才能であり、活躍ではないのか？

誰からも好かれる「野球少年」

別の一面もある。だれからも好かれる性格だ。

試合中だというのに、相手チーム選手が、大谷選手が出塁すると、ベース上でやたらに話しかける。やたらと身体に触りたがる。サインまでねだるというありさま。でも大谷選手はいやがりもしない。

また、練習中に子供たちが応援しているのを見かけると、あまりにも自然に「アクション」する。まるで子供同士の交流にも見える。

ベンチでふざけ合う姿もまるで子供だ。

誰かが大谷選手を評して「野球少年」といったが、そうなのかもしれない。

こうした姿をみるにつけ、野球選手としての大活躍との大いなるギャップがさらなる魅力となっている。

これから先、「野球少年」は、どんな大人になっていくのかも筆者の秘かな楽しみである。

寝るのが大事、ニューヨークの街を知らない

WBCで一躍有名になったヌートバー選手が大谷選手を食事に誘ったときに、大谷選手からの返答は「寝る」だったという。

筆者は思わず吹き出してしまった。あまりにも返答が常識の枠を超えている。

いったいどんな生活をしているのだろうと逆に興味を抱いてしまう。

あるとき、良く眠るためのこだわりの一端が垣間見えたときもあった。寝具に示す異常なこだわりである。

大谷選手にとっての眠りは、野球での活躍と表裏一体なのかもしれない。

少年時代の「寝る」ことに関する話を思い出した。

周りから大きくなるようにと、たっぷり牛乳を飲んで「すぐ寝る」のが日課だったという話である。ある意味でおかしくて、吹き出しそうになる。

また、あるとき、大谷選手がニューヨークにいたとき、街は散策したかと記者に聞かれ、「何も見ていない」と返答した。

街を出歩かない？普通の人なら、街に出てみようと思うが、彼はしない。

そこからは、並みの人間とは異なる大谷像も見えてくる。実生活をのぞき見したくなる。

子供のようなとんでもない夢に向かって異様な生活を送る「野球少年」

ここまでくると、数々の「記録更新」とは別の大谷選手像を引き出せないか？

生真面目、脇目も振らずに野球にすべてをかける、野球が好きだから、他のことで時間や労力を使うのがもったいないとかだと、実際の大谷像から外れてしまいそうだ。

子供のようなとんでもない夢に向かって異様な生活を送る「野球少年」とでも言えようか？そう考えるとなんだか納得がいく。

普通人の発想で考えるから理解不能になるのだ。

次は「新東北人リーダーモデル」の創出？

それにしても、大谷選手の「夢」はこれからさらに成長して、もっとでかくなりそうだし、終わりがないのかもしれない。

普通人からすると異様な生活をしても、そうした「夢」とすんなり調和して、少しも無理していないように見える。ごく自然なのだ。

それが大谷翔平という人間ではないだろうか。

この大谷選手の生き方から新たな東北人リーダーモデルを引出せないだろうか。

常識を軽く飛び越え、子供のような夢を持ち続け、好きなものに没頭し、価値観も生活スタイルも並外れ、いとも簡単に世界超一流となる人材が東北にたくさん出てくれば、「東北再興」の突破口は必ず開けると思う。

MLB オールスター2023　アメリカンリーグトップのファン投票・・・NHKTV より

MLB オールスター2023　アメリカンリーグスターティングメンバー・・・NHKTV より

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

【当新聞発行責任者
兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】

宮城県生まれ、69 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて 4 作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

新シリーズ【東北を再発見する旅】・・・　① 蔵王の秘湯

わずか14室、知る人ぞ知る秘湯　『青根温泉　湯元不忘閣』

約470 年前、伊達政宗がこの温泉で遭遇した感激と喜びを忘れないということからの命名・・・『不忘閣』の掛軸のある『青根御殿』内部

『青根温泉の不忘閣』

長かったコロナ禍が明けたら、骨休めのために温泉旅行に行きたいとずっと思っていた。

どこがいいかとあれこれ思案していたが、出来れば秘湯ともいえるようなところに行きたい。できれば東北がいい。

近代的な鉄筋造りのホテルに泊まっての温泉旅行は何だか骨休めにならないような気がしたので、できれば奥まった地方の木造建屋の旅館で、温泉もどこか野趣あふれるようなところがいいと思っていた。

それで唐突に思いついたのが、宮城県蔵王の奥座敷の青根温泉の「湯元不忘閣」だった。

約四百七十年前に伊達政宗も逗留した温泉

もちろん行ったことはかく、評判を頼りにするしかなかったが、何よりも古くて歴史があるのが魅力だった。開設以来四百七十年説とか四百九十年説もある。建物も古い木造で、温泉も六種類あるというではないか。さらに最近では希少価値の源泉かけ流し温泉である。

当方の要望に合致するのでここに決めた。

さらに調べてみると、伊達政宗はじめとする伊達家に縁の深い温泉だと判明。政宗がこの温泉に逗留してあまりに感激したために、忘れないようにと「不忘閣」としたとの話もある。

政宗の後も伊達藩御用達の温泉として存続し、現在に至っている。

また、「青根御殿」とか「殿舎」とかいわれる木造建築は見るだけでも価値がある。

宿泊二日目の朝、そこに案内を頼むと、書物や掛け軸、伊達家ゆかりの美術品や伊達政宗の父の甲冑など多くの貴重な資料が展示・陳列されていた。

さらに、作家の山本周五郎など多くの文豪が訪れたことでも知られている。

そんなことで、先月末、東北新幹線の白石蔵王駅で降り、そこからバスで揺られること小一時間、旅館側のお迎えの車との待ち合わせ場所へ。そこからさらに約十分でようやく宿に到着。

ワクワクの六つの温泉

到着後にひと通り説明を受けたが、一番興味をそそられたのは六種類もあるという温泉。ひとつひとつみな形態が異なる。実際にどんな温泉なのかいち早く体験したいと思った。

説明によると、「蔵湯浴司（くらゆよくす）」「亥之輔（いのすけ）の湯」という二つの貸し切り風呂に加え、大小2種類の「御殿湯（ごてんゆ）」、リニューアルしたばかりの「大湯 金泉堂（きんせんどう）」、そして「新湯」という六つの浴場がある。あいにく「新湯」はたまたま工事中で残念ながら入れなかった。

各温泉は時間によって男女入れ替え制になっていて、同一時間に入れる温泉が限られる。

部屋で一休みしてから早速温泉へ行くことにした。

最初は、一番大きな湯船のある「御殿湯」に入る。

宿の部屋数がわずか十四室ということで、客数も少ないので、最初の「御殿湯」は筆者が一人だけ。

入室から出るまで、夕方の温泉を独り占めできる幸福をたっぷり味わった。このひとときが、温泉旅には最高だ。疲れがどこかへ飛んで行った。

初日は夕食後にもうひとつの温泉「大湯 金泉堂」に入った。これもすばらしかった。「御殿湯」と同じく独り占めだった。

残りの三つは、朝方に入った。

どの温泉も満足いくもので、変化に富んでいた。

最終日に入った温泉で初めて先客がいたが、あとはすべて独り占め。この上ない至福の時間だった。

温泉通とまでは言えない筆者であるが、とにかくこの旅館の温泉はおすすめである。

食事がすばらしい

東京から蔵王まで遠距離移動しての連泊だったが、あわただしい一泊旅行は骨休めにはならないと思い、そうした。

おかげで五種類の温泉にもすべて浸かることが出来てほんとうによかった。

それだけでも満足のところ、さらに良かったのは、とにかく食事がなんともすばらしかったことである。

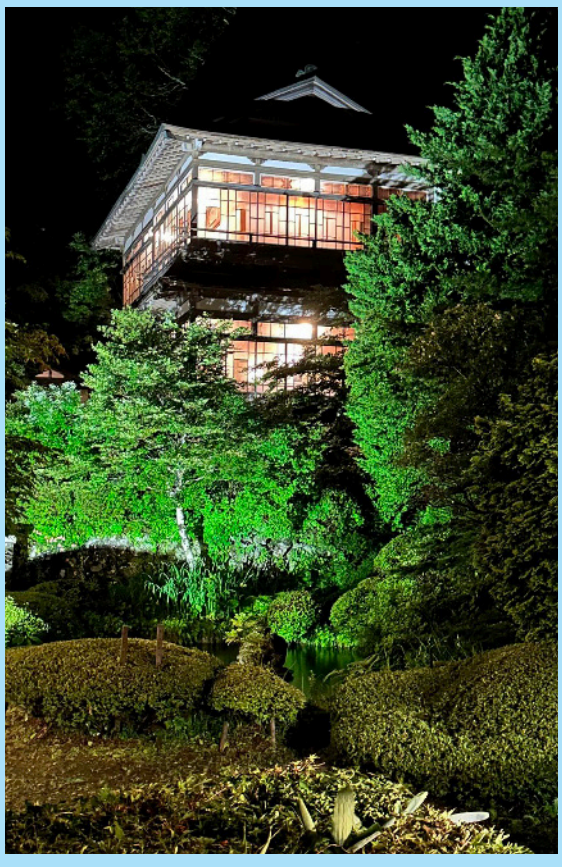
初日の夕食も、これが蔵王の奥座敷なのかと思えるほどの凝りようで、まるで高級料亭で出される出来栄えだった。

朝食も手抜きなし。食べきれないほどのおかずが次から次へと出てくる。

筆者もよく食べる方の部類ではあるが、もう参ったというほどの量である。

さらに驚かせたのは、二日目の夕食と最終日の朝食。前日とはメニューがほとんど入れ替わっている。

伊達家ゆかりの由緒ある『青根御殿』・・・夕暮れ



伊達家ゆかりの由緒ある『青根御殿』・・・照明に浮かび上がる

遠刈田温泉の共同浴場・神の湯

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

仲居さんに聞くと、連泊のお客さんにはいつもそうしているとのこと。ありがたかった。

遠刈田温泉の神社巡り

二日目の昼食は出ないということだったので、旅館の方に、遠刈田温泉まで車で送っていただいた。

昼食には少しだけ早かったので近所を散策。

まず、さすがに蔵王を控えた土地柄で、巨大な蔵王大権現の大鳥居が迎えてくれた。

その鳥居をくぐって、本殿ものぞいてみようと坂道を登っていった。

しかし、勾配がひどく、おまけに道が傾斜していて、濡れていて足場も悪い。

一旦登り始めたので、最初の建造物までは行ってみようと我慢した。

ほどなく湯神神社に到着。さらに上までの道のりが続きそうだったが、土の上り坂だったのであきらめて引き返した。

戻る途中で蔵王刈田嶺神社の本殿が見えたので、そこに旅行安全を願い参拝。

遠刈田温泉の共同浴場・神の湯

神社巡りで多少汗をかいたので、昼食の前に、もう一つの遠刈田温泉訪問の目的である、共同浴場に入った。

入ると、熱い湯の温泉とぬるめの湯の温泉があった。

ぬるめの方の温度が四十一から四十二度とあったので大丈夫と思ったら、何とすごく熱い。表示より二度くらい熱く感じた。

熱い方も体験しようとは思っていたが、ぬるめの湯で少しためらった。

意を決して四十四から四十五度の熱い湯に入ったが、やはりかなり熱い。三分程度で上がった。それ以上は無理だった。

そこで急に思い出されたのは、岩手の「夏油（げとう）温泉」。あそこの五十度程度の湯よりは低いという印象。

上がった後も汗が噴き出す。

得がたい体験

この旅館は、幸か不幸か、部屋数が少ないせいか、観光ビジネスの乱暴な嵐には巻き込まれていないようで、昔からの形をとどめて、無事に残っている。客層も良。

経営はけっして楽ではないだろうと推察できる。

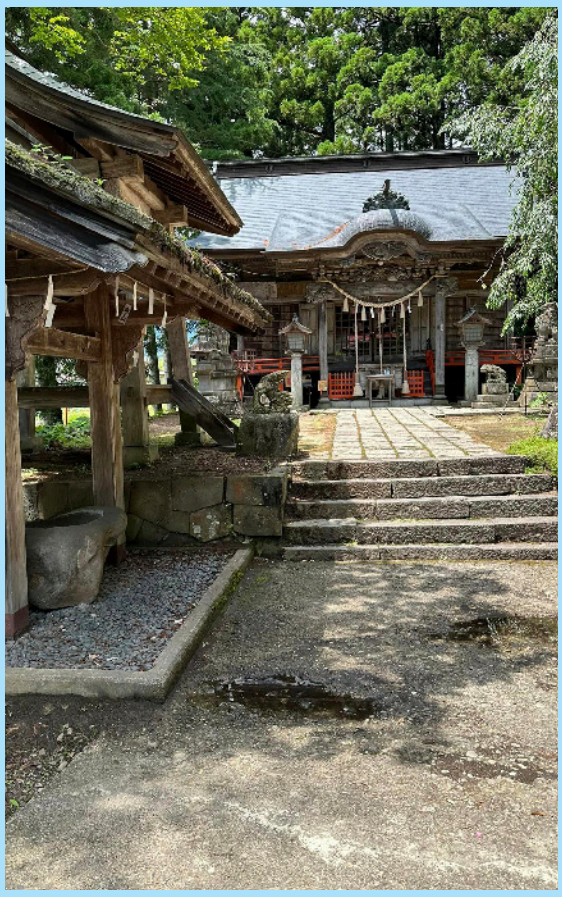
しかし、筆者の連泊体験はこの先も忘れることがないだろう。それほど満足だった。本気でリピーターになろうと考えている。

こうした東北の希少な観光資源をいつまでも残したいと思ったし、そうなるように祈るのみである。

最後に、平日がおすすめ。旅館も平日客大歓迎とのことであった。

青根温泉　思手成し酒

蔵王大権現


蔵王刈田嶺神社

湯神・古峯神社

鯛の兜煮

鱧のお吸い物

キジ鍋

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新シリーズ【東北の“食”を掘り起こす】…『ホヤ』

第一回目は東北の海産、海産といえば『ホヤ』、ホヤをホヤ専門店で味わい尽くした

今回号から開始する新シリーズ第二弾は【東北の〝食〟を掘り起こす】である。

第一回目は東北の海鮮を取り上げる。一番に掘り起こす必要があるのは、やはり【ホヤ】である。

ホヤの南限は宮城県で、以前は関東以南の海鮮居酒屋ではその取扱いに慣れておらず、鮮度の落ちたホヤを食したお客が一気にホヤ嫌いになったことがあった。

今は鮮度を保持しつつの輸送が常識で、新鮮なホヤは関西にまで進出している。

そんなことで、ホヤの本場・仙台駅前にあるホヤ専門店の『まぼ屋』で超新鮮、当日水揚げ、当日提供のホヤを味わい尽くした次第。

まずは、定番の『ホヤの刺身』だが、お供は東北地酒と相場が決まっている。『綿屋』、『AKABU』、『日高見』を次々に注文。久しぶりだったがやはり美味いね。

刺身だけではホヤ専門店に来た甲斐がない。店にあるホヤ料理を食べ尽くした。

最初に注文したのは出来上がりに時間がかかる『ホヤ釜めし』、これはほんとにおすすめだ。次は付け出しの『ホヤの冷製スープ』、お初だったがホヤの風味たっぷり。『ホヤの唐揚げ』も歯ごたえがいい。『ホヤポテトサラダ』も美味い。『ホヤホヤホヤ卵』も良かった。どれをとっても美味いのだ。

ホヤ嫌いという方にはぜひこのお店でホヤの本当の味を味わって欲しいと心から願う。当然、東北地酒も！

ホヤ料理ベスト10

超新鮮なホヤ・・当日水揚げ・当日提供を味わう

ホヤ釜めし最高！

ホヤ唐揚げ

ホヤホヤホヤ卵

ホヤポテトサラダ

付け出しのホヤ冷製スープ

東北地酒・・・綿屋

東北地酒・・・AKABU

東北地酒・・・日高見

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新型コロナウイルス感染症との距離感

五類移行に伴う変化

新型コロナウイルス感染症が五類感染症に移行してから二ヶ月余りが経過した。感染症法では感染症について、その感染力や感染した場合の重篤性などを総合的に勘案して一類から五類に分類して、それぞれに感染拡大を防止するために行政が講ずることができる対策を定めている。新型コロナウイルス感染症はこれまで、「新型インフルエンザ等感染症（いわゆる二類相当）」とされてきたが、今年の五月八日から「五類感染症」に変更されたわけである。

二類相当では、感染症法に基いて行政が様々な要請や関与を行っていたわけだが、五類ではそうした関与がなくなる。「個人の選択を尊重し、国民の皆様の自主的な取組をベースとした対応」に変わることになった。具体的な変更のポイントとしては、①政府として一律に日常における基本的感染対策を求めることはない、②感染症法に基づく新型コロナ陽性者及び濃厚接触者の外出自粛は求められなくなる、③限られた医療機関でのみ受診可能であったのが幅広い医療機関において受診可能になる、④医療費等について健康保険が適用され一割から三割は自己負担いただくことが基本となる（一定期間は公費支援を継続する）、などが挙げられている。

二〇一九年一二月に中国で確認されて以降、世界的に感染が拡大した。二〇二〇年の一月には早くも日本でも感染者が確認された。国境を越えた人の行き来が頻繁な現代においては、感染症の拡大スピードも速いことが如実に示された。今年三月までの三年間で、世界の感染者数は実に六億七六五七万人、死者は六八八万人にも及んだ。

過去に世界的に大流行したインフルエンザ、いわゆる「スペイン風邪」が一九一八年から一九二〇年の三年間に亘って猛威を振るった例があったので、今回の新型コロナウイルス感染症も収束までには同じくらいの時間が掛かるのではないか、ただスペイン風邪の頃にはなかったワクチンなどが開発されればより早く収束に向かうのではないか、などと考えていたが、結局ここに至るまでに同じく丸三年掛かったことになる。

この三年の「新しい生活様式」

この三年というもの、我々の生活様式はガラリと変わった。この新型コロナウイルスが、感染力が強いばかりでなく、感染しても無症候や軽症にとどまることも多く、意識せずに感染を広げてしまうことがあるという厄介な特性のあるウイルスであったことから、感染拡大を防ぐために、「咳エチケット」や手指衛生に加えて、「密閉」「密集」「密接」の「三つの密」を避けることが求められた。「密集」では、「他の人とは二メートル以上距離を取る」「飲食店の座席は隣の人と一つ飛ばしや互い違いに座る、「密接」では、対面での会議や面談はなるべく避け、避けられない場合は十分な距離を保ち、マスクを着用する、多人数での会食は避ける、エレベータや電車の中での会話を慎む、といった対策である。要は、感染拡大防止のために、人との接触をできる限り最大限避ける方向での対策の徹底が求められたわけである。

そして、「新しい生活様式」が提案された。感染防止の基本は①身体的距離の確保、②マスクの着用、③手洗い、であり、感染が流行している地域からの移動、感染が流行している地域への移動は控える、仕事はテレワーク、会議はオンライン、などが推奨された。「人との接触を八割減らす、一〇のポイント」なども示された。「ビデオ通話でオンライン帰省」「飲み会はオンラインで」「飲食は持ち帰り、宅配も」「仕事は在宅勤務」など、徹底的に人との接触を減らすことが「コロナ禍」における「新しい生活様式」となった。

もちろん、こうした対策の徹底によって感染がある程度抑制された面もあるだろう。わざわざ一堂に会さなくても、オンラインで居ながらにして遠く離れた人と会議ができる便利さに気付かされた点もある。一方で、人と人とが集い、面と向かって語らい、時間と空間を共にする機会は激減した。感染が拡大して緊急事態宣言が出された時期は、そうして人が集う場だった飲食店に営業の時短や酒類提供の自粛が要請され、イベントの開催の自粛も要請された。これによってダメージを受けたのは飲食店やイベント主催者だけではなかったろう。人と人とをつなぎ、共に楽しめる場をなくしたことによる私たちのダメージもかなり大きかったと思う。

「飲み会はオンラインで」と言うが、オンラインでの画面越しの「飲み会」は、飲食店やイベント会場のようにできただろうか。ZOOMに代表されるオンライン会議システムを使うと、画面上にタイル状に分割されて参加者の顔は見える。ただ、通常の飲み会のように、あちこち同時多発的に話に花が咲く、ということはなく、オンラインでは同時に話すと収集がつかなくなるので、一人が話しているのを他の皆が聞く、という形になりがちである。話をするのは順番待ち、ということでは思うように話ができないし、何より誰かと個別に話をすることもできない。結局、オンラインでの「飲み会」は、今までの飲み会とは似て非なるものであり、十分な代替手段とはなり得なかったのではないだろうか。そのためか、時間が経つにつれて、オンラインでの飲み会の話はとんと聞かなくなった。

実は、ZOOMとは違うオンライン会議システムの中には、画面上に空間の概念をうまく取り入れて、画面の隅っこで内緒話ができるようなものもあるのだが、残念ながらZOOMに取って代わるまでの存在にはならなかった。毎月第三火曜日に仲間と開催している「せんカフェ」は現在、会場とオンラインのハイブリッド開催だが、オンラインの方はそうしたユニークなシステムの一つであるSpatial Chatを用いている。

学会や研究会もオンラインでの開催がメインとなった。オンラインでの開催のメリットとしては、遠隔地での開催であっても時間と交通費を掛けずに参加することができるということが挙げられる。その一方で、学会や研究会の醍醐味というのはただ参加することで得られるものでなく、それ以外の部分も大きい。端的に言えば、普段なかなか会えない人と学会の場で会えたり、今まで知らなかった人と知り合いになれたりということが実はかなりのウエイトを占めていたように思う。これもなかなかオンラインでは代替できない。

戻ってきた「元の生活様式」

これまでの三年間と比べて、今年はこうした面が大きく様変わりした。この三年間ずっと中止となっていたイベントが四年ぶりに開催されたり、学会や研究会が会場での開催に戻ったりしている。学会や研究会の場合、「せんカフェ」のように会場とオンラインのハイブリッド開催という手段を取ることもできそうなものだが、規模が大きくなると会場開催の経費とオンライン開催の経費の両方が掛かり、そのコストがかなり大きなものになることもあるようで、実際はどちらかにせざるを得ない状況があるようである。そして、そのどちらかを選ぶ際に選ばれているのは見ていると、多くの場合会場開催の方である。それは会場開催のメリットの方を、オンライン開催のメリットより重要視しているということの現れであろう。

これまで三年間開催されていなかったイベントも今年はかなり復活してきている。私の身近で言えば、何と言っても屋外のビールイベントである。先月、コロナ禍前は毎年運営の手伝いに参加していた福島市内のビールイベント「ビアフェスふくしま」が四年ぶりに再開されたので早速手伝いに行ってきた。初日の午前中からそれはもうものすごい人出で、参加する方も待ちに待った再開だったことが窺えた。三日間の開催だったが、二日目の午後には用意したビールやフードがほとんどなくなってしまい、各社、各店慌てて三日目の分を取りに戻ったり仕込んだりしてようやく三日間を終えたような状況であった。

来月、再来月などは、東北各地で開催されるビールイベントが各週とも二つないし三つ重なっており、どのイベントに行くか悩ましい状況である。三年経って、ようやくそこまで「元の生活様式」が戻ってきたということである。

「さらに新しい生活様式」を

「ヤマアラシのジレンマ」として知られる話がある。この寓話はショーペンハウアーによるものであるそうだが、原典では「ヤマアラシの一群が、冷たい冬のある日、おたがいの体温で凍えることをふせぐために、ぴったりくっつきあった。だが、まもなくおたがいに棘の痛いのが感じられて、また分かれた。温まる必要から、また寄りそうと、第二の禍がくりかえされるのだった」と紹介されている。この話は現在、近づきすぎると痛い、遠ざかりすぎると寒い、を繰り返して、ちょうど痛くも寒くもない距離を見つけ出した、という対人関係の適切な距離感を説明するのによく使われる。

この三年間はまさに、コロナウイルスとの適切な距離感を探るための試行錯誤の時間だったように思う。コロナウイルス対策を万全に行おうとすればするほど、人と人とは離れていってしまう、かと言って近づきすぎると感染のリスクが拡大してしまう。

このような感染症の世界的大流行を「パンデミック」と言うが、これは有史以来繰り返し人類が経験してきているものである。二一世紀に入ってからだけでも、二〇〇二年のSARS（重症急性呼吸器症候群）、二〇〇九年の新型インフルエンザの流行があった。新型コロナウイルス感染症が一段落したとしても、ゆくゆくはまた必ず同じような新興感染症が発生する、ということは絶えず頭の中に入れておかなければならないのである。新型コロナウイルスとの付き合い方を試行錯誤したこの三年間の経験はその意味で決して無駄にはならない。肝心なのは、有事と平時の対応の切り替えである。

感染症への対応は、自然災害への対応と重なるところも多い。特に大雨災害である。それまでの降水量、それ以降の雨量予測など勘案して避難の必要性の有無を判断する。感染症についても、一定期間における感染者数の状況などが同様に判断材料となる。

人と人とが語らい、つながれる場の大事さについては改めて言うまでもない。平時はそれを最大限活かしつつ、新型コロナウイルス感染症、さらには今後起こりうる感染症への備えは怠りなくしておく必要がある。新型コロナウイルス感染症におけるマスクの着用、手洗い等の手指衛生、換気などは新型コロナウイルス感染症に限られた対策ではなく、感染症全般における基本的感染対策である。これらは今後は政府として一律に求めることはせず、個人の判断に委ねられた。我々としても、行政の判断におんぶにだっこ、ではなく、状況を見ながら一人ひとりが適切な感染対策を取ることができるよう意識を変えていかなければいけない。過剰に恐れすぎず、さりとて油断はせず、感染症との距離感を適切に保ち続けることが、これからまさに必要である。それが「さらに新しい生活様式」となるのではないだろうか。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

アフリカ、そして東北ー帰還すべき新たなる故郷たちの事

奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

自分が生きていく場所や旅をする場所を考えるに当たって、現在の状況・性格や趣向、体質などからその候補は限られると多くの人は考えるし、そう考えた方がどこか安心感があるものだが、時に人は己が望みもしない場所を旅し、更にはそこで長期間生きていかねばならぬ羽目に陥る事もある。個人的な過去としては一〇代の頃山形県から東京へ出る事ばかり考えていたら、思いがけず逆方向の札幌に一年間住む事になったが、結果的にその経験が自分の中の「東京至高主義」を無意識のうちに崩壊させその後の人生を大きく左右させる事になったと回想する。そのように、個人の中の「住むべき場所」「旅すべき場所」というものは常に思い込みに過ぎぬものなのかも知れず、実際には如何に齢を重ねても人には未だ潜在的な「新天地」があると考える事も決して無意味ではないかも知れない。

同じ東北人の印象的な体験といえば、二〇一七年出版の『バッタを倒しにアフリカへ』の著者で秋田県出身の前野ウルド浩太郎氏が思い起こされる。彼もまたファーブルに憧れ昆虫学者を目指すも国内に就職先がなく、「一発逆転」の生き残りをかけてアフリカ・モーリタニアへ旅立つ。しかしこれを聞いた時、私の中には偏見があった。東北とアフリカはあまりに距離的に遠いだけでなく、気候・文化・民族性全てにおいてかけ離れていて、接点がなさすぎる—と、かなり盲目的に思い込んでいたのである。だが、むしろ今こそ嘗ての「札幌インパクト」に次ぐ自らの先入観への新たな一打が必要なのではないか。そこで本稿ではアフリカと東北、という一見全くの別世界同士の邂逅で互いが得る視点や見えてくる未来について考えてみたい。

※

人類始まりの地として学際的に裏付けられてより久しいアフリカと、移動の果てに様々な困難から逃れた人々が行き着いた地とされる・日本列島陸奥・東北。片や日本列島の中でも特に少子高齢化傾向の激しい、消滅危機すら叫ばれる地域を擁する東北、片や現代世界で最も爆発的な人口増加を続けるアフリカ—両者がリンクするところを探ろう。

まずあらためて、アフリカとはどのような地域で、長年私を含めた多くの日本人の中にあるイメージと、実態にはどれほど開きが生じているのかを見ていく。冒頭の前野氏のみならず、近年アフリカや東南アジア方面に移住し、新たな事業を始めたり現地のインフラや教育現場に貢献する、私の世代よりは若い日本人たちの活躍を情報として受け取る機会が多くなった気がする。ルワンダ共和国に移住し、日本食レストランやホテルを経営して、貧困層のシングルマザーの雇用などに貢献する夫婦や、ベンチャー企業の海外駐在員として単身ルワンダに住み、現地の情報を発信する女性など、彼らが口を揃えるように言うには「新しい事を始めたいと考える人にとって、今アフリカは魅力的な土地である」という事だ。

日本のように社会が安定している国は多くの業界で「既得権」を有する上の世代が力を持ち新世代がチャンスを掴みづらいが、国を支える大企業も少なく、法律や社会のルールも未整備なアフリカの国々では、自ら始めたビジネスで社会そのものを変えていく事ができ、面白い事をダイナミックに展開できる可能性が高い、と言うのである。

ウガンダ共和国や南スーダンで国際協力活動を続け動画配信で現地の現状を発信する原貫太氏によれば、ケニアでは約九割の国民がスマートフォンを持ち（他の家電はあまり普及していないというが・・）ウガンダの首都では巨大な商業施設が建ち並ぶように、今まさにアフリカの多くの国々は経済成長の只中にある。

長い間非常に高かった乳幼児死亡率も格段に改善し今後若者が急増するアフリカは世界最大の成長のポテンシャルを持っている、と評価する有識者も多い。

しかし一方で、動画に対する意見として「アフリカは今後半世紀はたいして変わらないだろう」という声もある。アフリカの発展と見えるインフラのほとんどは欧米や中国など外資によるものであり、地元政府や民間が主導したものが皆無である事、乳幼児死亡率の低下についても日本を含めたNPO活動の賜物であり まだまだ現地民自らの意志で状況を改善しようという意志に欠けている、というのである。つまり前出の日本人夫婦のように知識や展望を持つ外国人にとってはフロンティアでも、真の意味での国の発展には現地人の意識改革が不可欠なのだ—ただ、多くの現地の日本人が感じるように、アフリカの人々のモラルや生活感覚は所謂先進国のそれとは大きく異なり、基本的にその日を楽しく生きる事ができれば良し、向上心とは無縁でまさに風の向くまま気の向くまま、日本人の言うところの「発展」など彼らは望んでいない、と断ずる声すらあるのである。ルワンダのように治安が安定している国もあれば、南スーダンのように内戦中で依然危険な地域もある。マラリアやエボラ出血熱など致死率の高い伝染病の発生する地域もある点は、正直二、三十年前のイメージからそう変わっていないかも知れない。なかなか変われない本当の意味での発展が進まないという現状も確かにあるとも言えそうではある。

人口の爆発的増加傾向については、前述の乳幼児死亡率の低下によるところも大きいが、アフリカ社会の成熟に伴い現先進国と同様少子化傾向に移行すると言われている。しかし、アフリカの多くの地域では依然「たくさん産まなければ女として認められない」という因習が根強いといい、そうした民族独自の価値観もまた変化していくのかどうか、確実な事は言えない。

しかしこうして見ると、価値観の違い・発展の意味合いの違いこそが、アフリカと東北を結びつける重要なカギではないか—とも思えてくるのである。古代より叛逆の民・蝦夷の地として中央より遠ざけられ、近代に入っても発展から取り残され遅れを取らされた東北。常に民の心には「発展」への憧れとともに発展とは何かという疑問が心に巣食い続けた。ここ数十年、ようやく全国並みの発展を成し遂げたように見えたが、日本という国家自体の衰退とともにいち早く消滅の危機が叫ばれる状況下に陥っている。欧米的価値観にまみれた発展に最も遠く、また自らも疑い、独自の社会や自然との交感を意識してきた東北とアフリカは、実は最初からどこよりも遠いながら、どこよりも近かったのかも知れない。

そのように考えていた時私は東北とアフリカに接点がない、などという認識が我ながら誠に不覚であったと思い知らされる事になる—「宮城アフリカ協会」の存在を知る事によって。

日本には東京を拠点とする「一般社団法人アフリカ協会」という大きな組織が古くからあり、各地方の支部も活動しているが、地方独自の、且つアフリカ出身者自身による、国ごとではない全ての国を対象とした組織としても非常に珍しく全国でもほとんど唯一という。しかも、二〇〇二年に宮城県で始まりながら現在は東北全域にネットワークが広がっているという。

昨年、仙台で県知事を交えて行われた外国人県民との座談会記録によると、中国やネパール関連の組織代表とともに宮城アフリカ協会会長でガーナ出身のアスィードウ・アイザック・ヤウ氏が参加し、協会設立と運営について語った。氏は東北大学出身の工学博士で学生当時東北各地の主に国立大学在籍の留学生らと、在日中に何らかの形で地域と関わりたいとして呼応し合い、社会参加を通じてアフリカの価値観や文化を発信しながら日本との相互理解を深める活動を始めた。

高齢者施設や学校、農業現場や自治体のイベントへの参加、更にはアフリカにおけるビジネスセミナーを開催し両国企業の交流を深めるなどの他、何か問題が起これば話し合いで解決しながら留学生の帰国の際に多く起こる「逆カルチャーショック」などの不安にも対応、コロナ蔓延の頃にはワクチンや雇用の問題にも対処するなど、情報を流せば必ず全員が反応する程繋がりは強く、学業を終え帰国しても協会での絆は続くのだという。

県知事も指摘したが、アフリカと言ってもロシアや米国のような大陸を覆う一国ではない基本バラバラな国々なのに、国境を越えてアフリカで一つという組織が他ならぬアフリカ出身者自身の手で興されたのは驚くべき事だ。その設立が東北で為された事—元々一つだった東北が、長い歴史の中で分割されるも、有事には他地域ではあり得ない不思議な程の結束を見せる地であった事と、何か関連があると考えるのは、飛躍が過ぎるだろうか。

※

ところで、アイザック・ヤウ氏の出身地であるガーナにおいて近年興味深い動きがあった。二〇二〇年米ミネソタ州で起きた黒人男性拘束死事件を受け、前々世紀における奴隷貿易の拠点であり、この前年に最初の奴隷船が渡米して四百年の節目であったガーナの観光相より「今居る場所で必要とされていないと感じるならば、黒人の故郷であるアフリカへ帰還せよ」と世界各地で未だ差別に苦しむ全アフリカ系住民への呼びかけが為されたのである。

過去、モハメド・アリやマルコムXが精神的に志向したアフリカ回帰が、今や実際に経済発展を遂げつつある本大陸にて、他国で力をつけた同胞たちがそれぞれの技術を存分に発揮してくれる事を現実の未来として期待されている—その事に、驚きとある種の感動を隠せないのである。実際に米国よりガーナに移住した黒人女性は「ここにいた方がアイデンティティの土台を得て、自由な心で壮大なアイディアも実現できる」と語る。この事は、まさに今の東北が抱える苦悩と、あるべき展望、起こすべきアクションを想起させずにおかない—「東北へ帰還せよ」と本当は、東北人は呼びかけたい。だがそれが今できる者がいるだろうか。

東北を愛するアフリカの人々が、これからも多く移住してくれたら嬉しいが、本来彼らが最も幸福に暮らせる地に、アフリカはならねばならないはずだし、東北人にとっても東北はそうでなければならないはずである。人々が旅立ち、また帰還する地として、アフリカが、そして東北が為さねばならぬ事は何か—ともに地球という環境の未来のカギを握るという全く規模の異なる二つの故郷が見せる未来に刮目していきたい。

AFAM
African Association of Miyagi

宮城アフリカ協会ＨＰより

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

マルザキヤマオダマキ

フナバラソウ

ノカンゾウ

シリーズ　遠野の自然

「遠野の小暑」

遠野１０００景より

写真の「マルザキヤマオダマキ」は、いま放映中のNHK朝ドラ主人公のモデル・植物学者の故牧野富太郎氏が百十年前に日光で採取していたことがニュースとなり、遠野で有名になったためずらしい花とのこと。

岩手県内でも数カ所の自生が見つかっているだけのようです。花でいろいろなご縁がつながりました。

遠野の小暑は、郷土の祭りの神社奉納の季節でもあります。小さな子供たちが踊る様子は無敵です。どんな被写体もかないません。

それにつられて、キツネの親子も顔を出す？

それらをきれいな花々が囲む構図をつなげてみると浮世の憂さも忘れます。

田植え踊り

黄色いハナショウブ

キツネ親子と遭遇

祭りの子

しし踊り奉納

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする　東北の風景　　写真撮影　尾崎匠

さようなら　「SL 銀河」

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.